

琉球大学学術リポジトリ

「言語コミュニケーション概論2」におけるラーニング・ポートフォリオ実践報告

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学大学教育センター 公開日: 2018-07-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 東矢, 光代 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/41045

「言語コミュニケーション概論Ⅱ」 におけるラーニング・ポートフォリオ実践報告

法文学部 東矢光代

0. はじめに

自らの学習をふりかえり、次なる学習に生かしていくことのできる「自律した学習者」を育成することは、大学を卒業後、社会において生涯学び続ける学習者の育成につながり、大学教育の大きな使命であるともいえる。しかしそれを日々の講義・教授の中で改めて意識する機会は少ない。ともすれば教え方は同じことの繰り返しに陥りやすく、年を追って変化していく入学生とのギャップを感じながらも、有効な手立てを探せずに時間だけが過ぎてしまう事もしばしばである。そのような中で今回、大学教育センターの依頼を受けて、「ラーニング・ポートフォリオ」を取り入れた実践をH24年度後期に行なうことになったのは、ありがたかったとも思う。発端は同センター主催の土持ゲーリー法一先生（『ラーニング・ポートフォリオ：学習改善の秘訣』著者）のセミナーに参加したことにある。そのセミナーで学んで得た授業改善へのヒントを元に、今回の実践を行なったのだが、「ラーニング・ポートフォリオ」自体、実際にはつかみにくいものである。今回の実践は、そのセミナーでの知識に基づいて、元々担当予定だった科目に比較的簡単に取り入れられると判断した手法を取り入れたもので、完全な形での「ラーニング・ポートフォリオ」実践だとは思っていない。むしろ「学習者のやる気を引き出し、学びの質と量を確保するために、今以上にどのようなことができるか」を、できる範囲で試した実践の報告だと思っていたら幸いである。

1. 実践の概要

実践を取り入れたのは、「言語コミュニケーション概論Ⅱ（1年次後期必修専門科目：週1・2単位）」と「英語資格試験演習Ⅱ（3年次後期必修専門科目：週1・1単位）」の2科目である。本稿では、言語コミュニケーション概論Ⅱ（以下、言コミⅡ）の実践を報告する。同科目は昼間主、夜間主用に各々1クラスずつ開講し、2名のオムニバスで担当するため、私は後半の9回～15回プラス期末テストの8回の講義を担当した。同科目では英語のテキストをメインに内容を講義していくのだが、前年度（H23年度）から関連内容の理解を助けるために日本語の副テキストを導入し、同時にマインドマップの手法を取り入れることで、学習の質保証と効率化を図っていた。H24年度は前年度まで15回の講義だった内容を半分に圧縮する必要があったため、学習させたい内容を絞り、講義外学習を徹底させる必要に迫られた。そのような事情と、ラーニング・ポートフォリオの実践を組み合わせる試みたのが、①学期中の課題を一覧にして、それぞれの課題の概要、適切、評価基準（ループリック）を学期（担当回）最初のオリエンテーションで配布し説明する、②学期末に学習をふり返る「省察レポート」の提出と、授業内で取り入れた試みについてのアンケートを義務付ける、の2点であった。ちなみに私の担当回（8回）の提出課題は以下の通りであった。

- ・DVD視聴課題プリント（赤ちゃんの言語発達・失語症 各3ページ）2回
- ・副テキスト（『外国語学習の科学』）の章ごとのマインドマップ 計5枚
- ・省察レポート（A4 1～2ページ）
- ・ふりかえりアンケート

授業ではこれ以外に、あらかじめ読むべき要点を質問にした Study Guide に沿って英語のテキストを読み予習してくることで、期末テストも課している。ループリックは「DVD 視聴課題プリント」「章ごとのマインドマップ」「省察レポート」についてそれぞれ準備した。以下に「DVD 視聴課題プリント」のループリックを参考として掲載する。この課題は 5 点満点であるが、すべての提出課題に私は満点以上の「Super!」を設けている。またいい加減な課題は受け付けない、というメッセージを込めて「Redo (やり直し・再提出)」も設けている。これらを学期最初に学生に明示することによって、教員側としても課題の採点がしやすくなったと感じた。

Super! (6 points)

Excellent! の状態よりも明らかに秀逸で、クラスの中でも特に優れた学習の跡がみられる。

Excellent! (5 points)

すべての情報が正しく適切に記入されており、解答欄がきっちり埋まった状態である。Very Good! よりも優れていることが見て取れる状態。

Very Good! (4 points)

誤情報はたまにあるが、それぞれの項目に対しすべて解答が適切に記入されており、DVD の視聴から十分に知識を吸収したことがうかがえる。

Good! (3 points)

埋まっていない項目や誤情報がところどころ記入されているが、全体的に学習の跡がみられる。ただし、記入された情報量がやや少ない。

Redo (0 point)

空欄が多く、DVD から十分に知識を吸収したことが確認できない。OR 他の受講生と同じ文言の解答が目立つ。再提出がない限り、得点はつかない。

さて、省察レポートでは何を尋ねたらよいのか。今回は土持氏の『ラーニング・ポートフォリオ』p. 147 に記載の設問を利用し、受講生に以下のような執筆要項を配布した。

この授業の後半 7 回 (東矢担当分) について、以下の問いに答える形で省察レポートを書いて提出してください。すべての問いに答える必要はありませんが、授業での学習過程を省察する手がかりとして、以下の問いを挙げてあります。

- (1) この授業から何を学ぶことができましたか。あるいは逆に学ぶことができませんでしたか。
- (2) どのような状態で最も学ぶことができましたか。あるいは逆に学ぶことができませんでしたか。
- (3) なぜ学ぶことができましたか。あるいは逆に学ぶことができませんでしたか。
- (4) 学習者として何をどのように学びましたか。
- (5) この授業は、他の授業の学習やこれからの人生にどのようにつながりがありましたか、またはつながりがある(ようになる)と思いませんか。
- (6) この授業は実践的な学習に役に立ちましたか。
- (7) この授業を楽しむことができましたか。それはどのような意味においてですか。
- (8) この授業をもう一度やり直すとしたら、学習を高めたり、向上したりするために何か違ったことをしますか。

レポートをまとめるにあたって、①教員によるシラバス (スケジュールおよび課題と採点基準の提示) の説明、②授業中の教員の説明や指示、活動、③そこに参加した (学習者としての) 自分の態度、④授業前後の予習復習の状況、⑤課題に対する取り組み、⑤提出した課題 (あるいは未提出の課題) などをすべてふりかえった上で、(1)~(8) の問いに答えるつもり (全部である必要はなく、自分がふりかえりやすいものを複数選んでよい。ただし最低でも 4 個以上) で書いてください。

- ・問い(1)については、後半 (東矢担当分) のシラバスに掲げた達成目標を視野に入れて書くようにしてください。
- ・(1) ... (2) ... のような列挙ではなく、全体として 1 つのレポートとしてまとめるように、本文を書いてください。

このうち(1)～(8)が、土持氏が挙げていた設問そのままになる。ただし土持氏の実践では、受講生は学期中に取り組んだ課題とフィードバックを証拠資料として一緒に提出することになっていたが、私の実践ではそこまでは行っていない。また初めての試みで、レポートは1～2枚としたため、(1)～(8)すべての設問に答えるには量的に難しいと判断して、学生に設問を選ばせることにした。アンケートの内容(項目)に関しては、結果の項で紹介する。

2. 実践の結果と考察

まず今回の実践を通して、学生が提出してくる課題の質が格段によくなった、というのが一番の実感である。単純に比較はできないが、例えばDVDを視聴しての課題プリントには押さえるべき(学生に学習してもらいたい)ポイントが挙げてあり、学生は視聴を元にプリントを埋めなければならないのだが、書かれている情報量(文字数)が明らかに過去の年度よりも多かったし、スカスカ、空欄の状態で提出する学生は皆無だったと言ってよい。また日本語の副テキストを読んでマインドマップにまとめる作業も、前年度は15回の講義で、十分書き方の指導や、受講生同士のマップのシェアリングもできたのに対し、H24年度は時間の制約のために、ほとんど授業外の作業、学生の自主学習・努力にまかせた状態だったのだが、マップの出来も提出状況も前年度と遜色なく、むしろ私の方がおどろいてしまった。そしてやはりループリックが効いたのか、いい加減なマップの提出は抑えられていた印象がある。

省察レポートからは、受講生が授業内容や提示された課題に対し、どのように感じ、取り組んでいたかを読み取ることができた。量的な分析はまだ途中であるが、教える側としては想定していた記述と想定外の記述があり、示唆に富んだものであった。予想通りだった記述内容としては：

- ・課題の量が多くて大変だと思ったが、最初に細かく提示されることで、計画を立てて取り組むことができた。
 - ・英語のテキストの予習が追い付かず、ただ授業に出るだけだったときは学びが少なかったと思う。次回やり直すとしたら、この点を注意したい。
- などがあった。また(1)の設問に関しては、授業中に学んだ内容について触れたり、学習した項目を列挙した記述が多く、(3)、(7)の設問に対しては、元々この分野に興味があった(なかった)から、という回答が散見された。そして(5)、(6)への回答として、授業外の課題とした副テキストで学んだ内容が、自らの外国語学習をふり返るのに役立ち、実践的であったり、将来に結びつく内容であったことを述べたレポートが目についた。一方、想定外だった記述の内容としては：

- ・先生が一生懸命授業で話しているのを見て、学習内容に対する興味がわいた。
- ・今まで他の授業でも課題を計画的にこなそうとしたがうまくいかなかったのが、この授業でスケジュールと課題を詳しく提示されたことで、きちんと取り組んでみてうまく行った。やればできると思った。
- ・評価基準を提示されたことが、やる気につながった。
- ・特に「Super!」を目指してがんばった。取れたときは「やった!」という気になった。
- ・課題提出を最後まで待ってもらえたことで、投げ出さずに取り組むことができた。

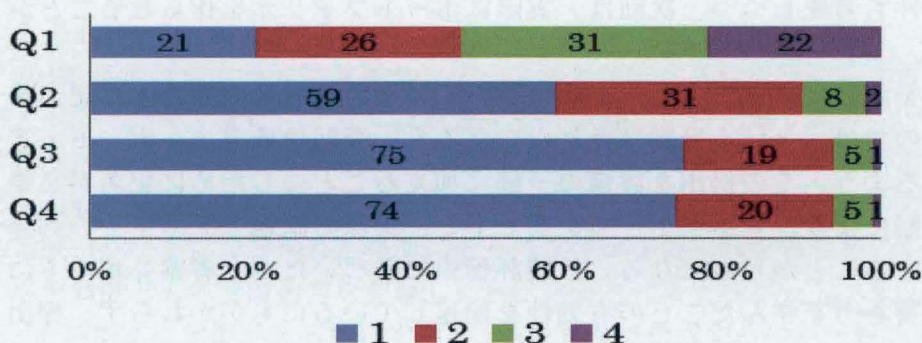
もちろんこれらは全員にあてはまったわけではない。しかし評価者としては、提出された課題の出来栄だけでなく、学生が何を考えて授業や課題に取り組んでいたかを知ること、なぜ学習がうまくいったのか、あるいはいかなかったのか、その理由を知る

貴重な手がかりになると感じた。これらの記述の中には、個人の特性による感じ方や思考方法もあり、また教員の統制が効くものと効かないものもある。それらを十分考慮したうえで、個々の学生に対して、レポートの内容と客観的な到達度評価と照合すれば、より受講生の学びを確保できるような授業の仕掛けを増やすことが可能になるのでは、と考えている。

最後にふりかえりアンケートの結果を紹介する。このアンケートでは、「シラバスの活用」および「ルーブリック」について各4項目を設け、「1. そう思う」「2. どちらかといえばそう思う」「3. どちらかといえばそう思わない」「4. そう思わない」の番号（1～4）の選択で回答してもらった。以下にその記述と結果（各項目に対する回答の割合）を記載する。これらの結果から、今回の実践に関して、学期の最初にやるべきことをすべて明示して渡すことは、学期を通じての自身の学習に資すると受講生に捉えられており（Q2-4）、またルーブリックに関しても、肯定的に受け止められたことが明らかになった（Q5-7）。

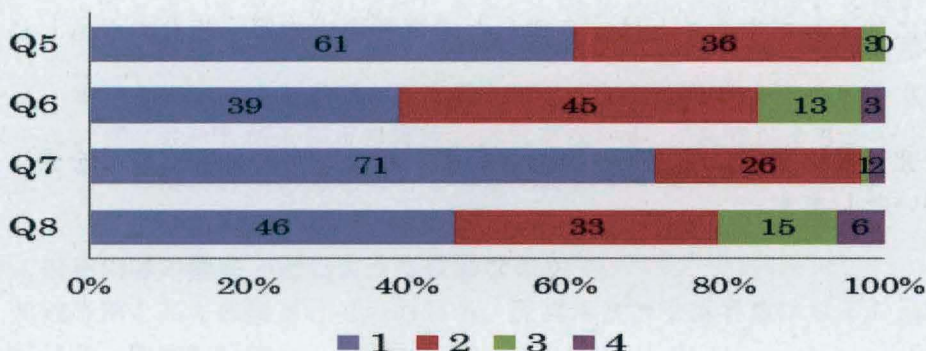
***シラバスについて**

1. Web シラバスに記載した到達目標を学期中意識した、あるいは見返したりした。（N=62）
2. 教室配布シラバスに記載したスケジュールと事前事後学習の記述は役に立った。（N=61）
3. 教室配布シラバスに記載した課題の一覧は役に立った。（N=61）
4. 教室配布シラバスに記載した課題の評価基準（ルーブリック）は役に立った。（N=61）



***ルーブリックについて**

5. ルーブリックはわかりやすかった。（N=62）
6. ルーブリックの評価基準を見て、安心して課題に取り組めた。（N=62）
7. ルーブリックの評価基準を見て、学習するモチベーションが上がった。（N=62）
8. ルーブリックはどの科目でもあったほうがよいと思う。（N=54）



3. まとめと今後の展望

今回の実践で取り入れた新たな試みが、自分の授業改善に大きくつながったことは間違いない。今までとほとんど変わらない課題内容で、より効率的な学びを引き出したことは、課題の提出状況と、提出された課題の質、期末テストの記述・得点状況から明らかである。受講生の学びの状況も省察レポートから読み取ることができた。しかし「ラーニング・ポートフォリオ」が一体何であり、学生にそれをどのように作らせ、自律学習に役立たせることができるのかについては、まだ答えは出ていない。

今回、学期末に省察レポートを課題とし、また期末テストに向けて、受講生が学期内（東矢担当分の7回の講義）の学習内容を見直すことで、自らの学習をふり返ることができると考えた。ただし成果をすべてまとめてファイル化し、それを一緒に提出させるところまでは行かなかった。1つには、私が「学習」に関するポリシーとして、「個々のメ切を過ぎても、必ず課題を提出すること。それは、やらなければ学ばないから。」という意思を受講生に伝えていたことによる。実際にかんがりの課題を、学期末にまとめて提出した学生もいる。しかしそれでも、メ切を過ぎたからといってやらないままでは、その学習の機会は閉ざされてしまうし、メ切ありきでいい加減に課題をこなして提出しても十分な学びは得られない、と考えている。「でも、ためてしまっただけで大変なもの、自分の責任だからね。」とも伝えており、実際にその通りだったと省察レポートに書いた学生もいた。そのようなこともあり、学習の成果をすべて並べて見直す機会を強制的に埋め込むことが、今回できなかった。省察レポートだけ書かせることも有意義ではあったが、上記のメ切の件も考慮しつつ、今回は、実際にポートフォリオを作らせることができるか検討したい。

また省察レポートを記名にしたことで、正直に書いていない（教師の期待する記述を書く傾向にあった）のでは、という批判は免れないだろう。今回は確実にレポート・アンケートを回収できるよう、その提出を評価の一部に加えることにするために記名が必要であった。また記名制により、レポート・アンケートと、実際の課題やテストでの到達度との整合性を検証することが可能になる。成績評価中に気づいたが、省察レポートにはマインドマップの書き方を学んだことの有効性を記述しているにもかかわらず、提出されたマップそのものの質が高くない受講生がいた。省察レポートのあり方に関して、客観評価との対応を細かにモニターする必要性を感じた例である。

最後に、課題の一覧、ループリック、スケジュールの提示が、これほどまで受講生の取組に変化をもたらすとは、私自身、予想していなかった。最近読んだ文献によると、学習内容の構成や順序を明確にし、教師が何を学習者に求めているか、どのようなステップをたどれば目標に到達するかを知らせることは、学習者のやる気につながる可能性が高いという。これらを細かく学期初めに準備するにはひと手間かかるが、受講生がより取り組みやすい形に加工してやることは、自律した学習者育成の第一歩なのかもしれない。

謝辞：今回の教育研究実践の分析に関して、うない研究支援センターによる支援を受けました。記して感謝いたします。